

市長賞

石坂 夢羽(いしざか むう) 由井第一小 6年生

作品名: 苦難な今だからこそ

図書: 明日をつくる十歳のきみへ ― 一〇三歳のわたしから

私は六年生。小学校最後の一年、楽しい思い出を作れると思っていた。しかし、友達とも会えない新学期から始まり、想像していた最終学年は大きく違った。新型コロナの影響により、運動会、修学旅行は延期になった。胃腸炎で入院もした。はっきりいって六年生になって悲しいことばかりだ。

入院したことがきっかけで、もう一度「明日をつくる十歳のきみへ」を読んでみたくなった。著者の日野原重明先生は「いのちの授業」を多くの小学校でしてきた医師である。命とは「自分が自由に使える時間」と著者は伝えている。大切なのは「ゆるしの心を持つこと」と「大人になったら人のために自分の時間を使えるような人になること」と書かれていた。それは、以前読んだ時、強く印象に残った言葉を思い出したからだ。

私は、六月に入院をした。今までの入院は親も一緒に付き添ってくれていたが、今回は、退院するまで面会すら出来なかった。私だけではなく、小さな赤ちゃんも親に会えない状態だった。体調が悪いのに、いきなり親と離れるのは予想していなかったもので、とても心細かった。何回も嘔吐してしまう私に看護師さんはやさしく、着替えやトイレなども笑顔で話しかけながら面倒を看てくれた。体が辛く心がさみしい患者一人一人にやさしくしてくれる看護師さんのおかげで、私の心と体はどんどん楽になり安心出来た。数日入院していて気付いたことがある。親のように寄り添ってくれる看護師さんの思いやりが患者の私たちに元気を与えてくれていることだ。正に、心も体も「人のために使う時間」の仕事であり、身を持って人の温かさを実感した。それがきっかけで、もう一度この本を読み返し、「いのち」や「時間」の大切さについて、今の自分にできることを考えてみた。

ニュースで、世界中が新型コロナ感染症と戦っている状況の中で、様々な差別があることを知った。命の危険を感じながら戦っている医療関係の方に対する差別を

耳にした時はとても悲しかった。何故なら、私が入院した時、本当に良くしてもらい感謝の気持ちしかないからだ。命を守るために頑張っている方が安心して働けるようになってほしいと本を読んでからは真剣に考えるようになった。

著者は、いのちの大切さを知って、いのちを守ろうと決意したみんなが「ゆるしの心」で争いを断ち切っていくと伝えている。

今はその言葉の意味を理解できる。みんなが思いやりをもって人のために使う時間を大事に考えて支えあえるような行動をすれば、差別はもっと減っていくだろう。大変な今だからこそ、一人一人が人とのつながりを大切にして助け合っていくことが必要であり、差別や人が悲しむようなことはしてはいけない。もしされても、自分のところで断ち切る「ゆるしの心」を持つことが大切だ。みんなで分かち合い、差別がない幸せな暮らしをしていきたい。私ができることは、今、生きていることに感謝をして助け合い認め合っていくことだと思う。

今回、本を読んで、過ぎたことに悲しんでばかりでなく、幸せになるための準備時間と思い直した。友達を大切にし、思いやりをもって最後の小学校生活も前向きに頑張っていこうと思う。今まで気が付かなかったような小さな喜びや幸せな時間を大切にし、素敵な仲間と笑って卒業できることを信じて。